

五代桧峯Ⅱ遺跡

保育園建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

はじめに

五代松峯II遺跡は北に赤城山を控え、南に関東平野を望む眺望の地です。付近には古墳時代、奈良・平安時代の集落跡が散在し、古代においても生活し易かった場所であったことが窺われます。春には山菜を、秋には木の実や芋を探集しながら野山に遊ぶ人々の姿が目に浮かびます。冬は赤城山からの空つ風が南の関東平野に向けて、音をたてて吹き抜けます。当時の利根川がその河床を関東平野の中に低く残しています。河や空つ風との戦いの中で力強く生活していたことでしょう。

平安時代の和名類聚抄によれば勢多郡の9つの郷名が赤城山の裾野を巡っています。

真壁、芳賀、時澤、藤澤、桂萱等の郷名が五代松峯II遺跡の近くに現在でも地名や河川名として存在し、この地の繁栄ぶりを一層想像させます。

前橋市指定文化財の奈良三彩の小壺が出土した遺跡地に隣接することも合わせ、非常に期待を持って発掘調査に臨みました。

奈良三彩に関係するもの、郷名に関係するものの発掘に夢を馳せ、新たな発見を願っていましたが、完掘した住居跡は1軒でした。古墳時代の比較的しっかりした住居です。

当初の狙いは果たせませんでしたが、この地に資料を1つ増加することが出来ました。

これから建設される保育園で遊ぶ子供たちに、この発掘調査が夢を与えるられるのではと確信しています。ご一読いただきまして、ご指導、ご鞭撻をお願いいたします。

平成10年3月31日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 中西誠一

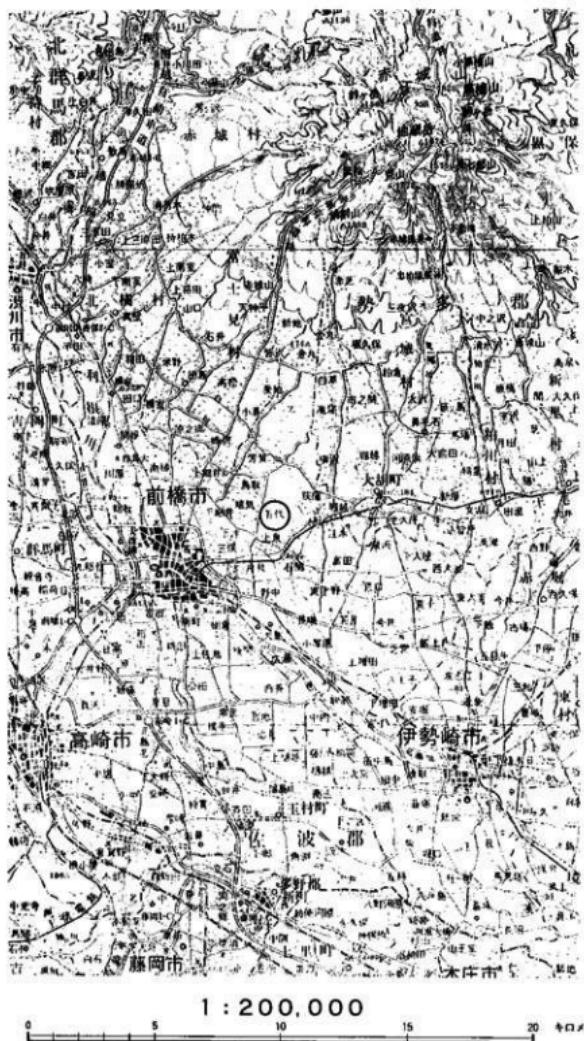


Fig. 1 位置図

—— 目 次 ——

はじめに

例 言

本 文

I 調査に至る経緯	3
II 遺跡の位置と環境	3
III 発掘調査の方法と経過	4
IV 基本層序	5
V 遺構と遺物	6
VI まとめ	8

挿 図

Fig. 1 位図	1	Fig. 6 遺跡・遺構全図	12
Fig. 2 五代塚Ⅱ遺跡周辺図	4	Fig. 7 H-1号住居址・焼土坑・土坑	13
Fig. 3 発掘区位図	5	Fig. 8 H-2号住居址	14
Fig. 4 基本土層図	5	Fig. 9 II-2号住居址	15
Fig. 5 入り口施設を持つ遺構と復元図	10	Fig. 10 H-1・2号住居址出土の土器、石製品、鉄器	16

写 真

Pl. 1 H-2号住居址

Pl. 2 調査区全景・出土遺物他

表

Tab. 1 住居址一覧表	6	Tab. 2 土坑一覧表	6
Tab. 3 遺物観察表	7	Tab. 4 石器、石製品、鉄器観察表	7

抄 錄

例 言

1. 本報告書は、保育園建設工事に係る五代塚Ⅱ遺跡発掘調査報告書である。

2. 本遺跡の略称は9C14である。

3. 調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。

4. 発掘調査の要項は次のとおりである。

調査場所 群馬県前橋市五代町1301番地3他

発掘調査期間 平成9年5月1日～平成9年5月30日

整理・報告書作成期間 平成9年6月2日～平成10年3月31日

発掘・整理担当者 坂口好孝・真塩明男（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）

5. 本書の原稿執筆・編集は坂口・真塩が行った。

6. 発掘調査・整理事業にかかわった方々は次のとおりである。（順不同）

石原義夫 岩木操 岸フクエ 渡木秋子 湯浅たま江 湯浅道子

I 調査に至る経緯

五代桧峯II遺跡は、五代町保育園建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成9年5月に実施された。発掘調査に至る経緯は以下のとおりである。

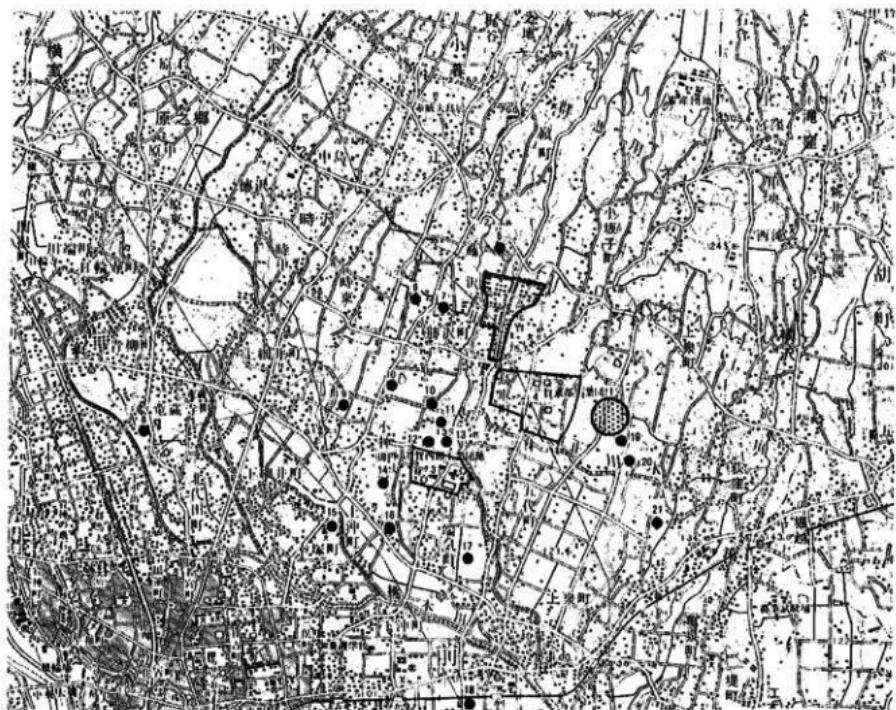
本遺跡の発掘調査に関して、平成8年11月11日付で社会福祉法人ふたば会より五代町地内の保育園建設工事に伴う埋蔵文化財試掘調査依頼が前橋市教育委員会に提出された。これを受け、前橋市教育委員会文化財保護課で試掘調査を実施したところ、本調査地は遺跡地であることが判明した。そこで、社会福祉法人ふたば会と協議・調整を行い、平成9年3月31日、前橋市教育委員会あてに本発掘調査の依頼がなされた。前橋市教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団はこれを受諾し、4月23日両者の間で本発掘調査の委託契約を締結、4月30日、現地での発掘調査を開始するに至った。なお、遺跡名称『五代桧峯II遺跡』の『桧峯』は旧地籍の小字名を採用している。

II 遺跡の位置と環境

五代桧峯II遺跡は、前橋市街から北東へ約5kmの五代町1301番地3に所在する。本遺跡の北西約1.3kmに市立芳賀中学校、南西約300mには芳賀東部工業団地があり、南方約2.3kmには古利根川の断崖が比高差5~6mで北西から南東にかけて、その姿をとどめている。遺跡地周辺の地形は南面緩傾斜台地で、現在も養蚕のための桑畑、牧畜のための牧草地等が広がっていて、間折谷にあたる箇所には水田が開けている。今回の調査の要因である保育園建設工事は、他所にある現保育園をより良い自然環境・教育環境を求めて移転建設する計画である。

今回の調査によって検出された主な遺構は、古墳時代の終末期のものであるが、周辺の遺跡に目を向けると、本遺跡を含む地域には、縄文から平安時代に至る遺跡がある。本遺跡の南東に隣接する桧峯遺跡は、奈良三彩小壺を出土した奈良~平安時代の集落跡であり、南西にある芳賀東部工業団地遺跡は、古墳を伴った縄文~平安時代の集落跡である。また、昭和13年の「古墳綜覧」によると本遺跡周辺に26基もの古墳が存在したことが記されているものの、現在では平坦化されており昔日の面影はない。

このように本遺跡をとりまく地域は、縄文時代から人々の生活の場であり、古墳時代には古墳を多数造れるほどの有力豪族の勢力地であり、その後もこの地での豊かな生活は続いていたと考えられる。



1 : 50,000 前橋

1000m 0 1000 2000 3000

- | | | |
|-------------|-----------------|----------------|
| 1. 五代檢峯II遺跡 | 8. 青柳寄宿道跡 | 15. 西新井遺跡 |
| 2. 芳賀北御山地道路 | 9. 衛田之口道跡 | 16. 瑞氣道跡群 I・II |
| 3. 芳賀西御山地道路 | 10. 小明神道跡群(2カ所) | 17. 大日塚古墳 |
| 4. 芳賀東御山地道路 | 11. 九科道跡 | 18. 茶木田遺跡 |
| 5. 東公園古墳 | 12. 舟木道跡 | 19. 鮎峯道跡 |
| 6. オブ塙西古墳 | 13. 西川道跡 | 20. 鮎峯古墳 |
| 7. オブ塙古墳 | 14. 大明神道跡 | 21. 新田塙古墳 |

Fig. 2 五代檢峯II遺跡周辺図

III 発掘調査の方法と経過

1 方 法

委託された調査箇所は、総面積約300m²のL字型鉄筋建築部分である。グリッドについては、4 mピッチで西から東へX 1、X 2、X 3・・・・X 15で表し、北から南へY 1、Y 2、Y 3・・・・Y 15と番付けし、グリッドの呼称は北西杭の名称を使用した。なお、X 7・Y 7の国家座標は、第IX系のX=46,232m、Y=-63,772mである。また調査は表土掘削・遺構確認・杭打ち・遺構掘り下げ・遺構精査・全景写真・遺跡全体測量の順に行つた。図面作成は平板・簡易造り方測量で行い、主要な遺構の断面等はスケール1/20で、遺構全体図はスケール1/40で作成した。

2 経 過

発掘調査は、平成9年4月30日、重機による調査区内の桑の抜根を開始。翌5月1日に抜根、表土の掘削を終了。表土掘削に追従してプラン確認を行い、5月7日に杭打ちを実施した。調査の結果、住居址2軒、土坑8基が検出された。住居址に関しては中央部分にあるH-2は当初何軒か複雑に切り合っていると想定されたので、8日まで最初に土坑を調査することにした。その後、調査を順調に進め、9日には8基の土坑を終了。12日にII-2をトレンチで、南側に入り口を備えた大型住居1軒を確認、II-2の調査を開始。また、H-2にかさなる炭化物の堆積する土坑を焼土坑とした。13日に入り口付近の柱穴と焼土坑を調査。21日貯蔵穴を調査。

22日棟補助柱、上屋補助柱を調査。27日住居址H-1の竪を調査。28日床下部分に新に2本の柱穴を発見、先の柱穴と両補助柱は住居拡張後のものと確認された。5月29日に発掘調査の全工程を終了した。全調査を通して桑根を除去しながらの作業は困難を伴った。また、完全な大型住居址の遺構は確認できたが、土器等の遺物が少なかった。



Fig. 3 発掘区位置図

IV 基 本 層 序

本遺跡地内の地層の堆積はFig. 4のとおりである。

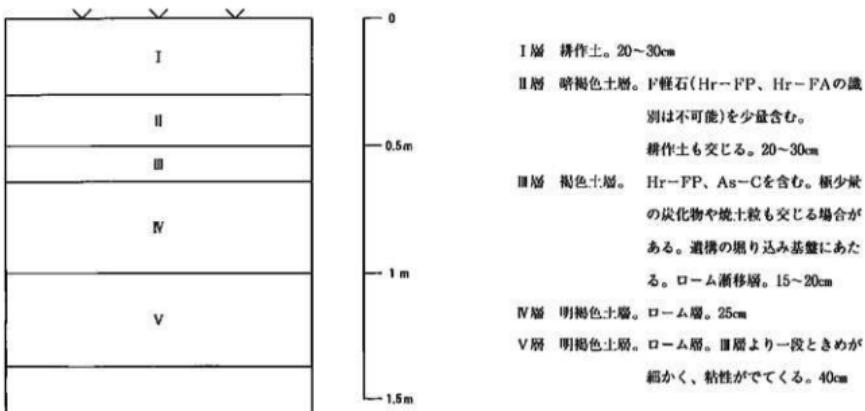


Fig. 4 五代松原Ⅱ遺跡標準土層図

V 遺構と遺物

Tab. 1 住居址一覧表

番号	位 置	規模(m)東西×南北	面積(m ²)	壁高(cm)	主軸方向	竪(cm)奥行×中	柱穴(cm)長×幅×深さ
H-1	X 9~10, Y 6~7	3.58×(2.46) 立ち上がり角 84°	4.3 (未完壁)	70.5	N-78°-E	50×(25) 立ち上がり角 50°	
H-2	X 7~9, Y 4~9	6.00× 6.00 立ち上がり角 74°	34.0	東側 90.0 西側 30.0	N-6°-E	105× 40 煙道部 立ち上がり角 49°	P - 1 96×77×65 P - 2 86×73×72 P - 3 83×62×85 P - 4 76×56×73 貯藏穴 100×62×44.5 床下柱穴 P - 1 35×35×63.5 P - 2 36×30×63

注) () 内の数値は現存値。

Tab. 2 土坑一覧表

番号	位 置	形 状	規模(cm)長径×短径×深さ	重複・備考
焼土坑	X 9 , Y 4~5	楕円形	176× 100 × 47	
D - 1	X 11 , Y 5	楕円形	168× 76 × 38	
D - 2	X 10 , Y 5	楕円形	123× 60 × 29	
D - 3	X 6~7, Y 4	不整形	100× 56 × 50	
D - 4	X 6 , Y 4	(円形)?	112× (76) × 33	
D - 5	X 7 , Y 6	楕円形	93× 72 × 21	
D - 6	X 6 , Y 9	楕円形	124× 106 × 38	
D - 7	X 5 , Y 9	(円形)?	(113× 50 × 23)	
D - 8	X 6~7, Y 8	コの字状	(130× 35 × 32)	

注) () 内の数値は現存値。

Tab. 3 遺物観察表

番号	出土位置	器形	大きさ		①断面 ②横幅 ③色調 ④残存	成・整形方法		備考	Pig.
			横幅	器高		II 線・網部	底部		
1	H-1	土師壺	(10.0)	(2.7)	①粗粒②良好③赤褐色④残1/8	外板。横腹で。荒削り。	欠損。	弱い外縁を持つ。	10
2	H-1	土師壺	(11.2)	(3.7)	①中粒②良好③赤褐色④残1/8	外板。横腹で。荒削り。	欠損。	弱い外縁を持つ。やや平底ぎみ。	10
3	H-1	土師壺	(12.4)	4.3	①粗粒②良好③にぼい緑④1/2	外板。横腹で。荒削り。	荒削り。	弱い外縁を持つ。	10
4	H-1	土師壺	(10.6)	3.6	①粗粒②良好③黒褐色④1/2	外板。横腹で。荒削り。	荒削り。	弱い外縁を持つ。	10
5	H-1	土師壺	(13.0)	(3.7)	①粗粒②良好③褐灰④1/8	外板。横腹で。荒削り。	欠損。		10
6	H-2	土師壺	(11.4)	(2.1)	①粗粒②良好③にぼい緑④1/5	直立。横腹で。荒削り。	荒削り。	弱い外縁を持つ。	10
7	H-2	土師壺	11.5	4.9	①中粒②良好③緑④1/2	直立。横腹で。荒削り。	荒削り。	深い丸底。	10
8	H-2	土師壺	(12.0)	(3.4)	①粗粒②良好③にぼい緑④1/4	外板。横腹で。荒削り。	欠損。	やや深い丸底。	10
9	H-2	土師壺	(10.2)	3.7	①粗粒②良好③緑④1/3	外板。横腹で。荒削り。	欠損。	弱い外縁を持つ。	10
10	H-2	土師壺	(11.0)	4.0	①粗粒②良好③緑④1/2	外板。横腹で。荒削り。	荒削り。		10
11	H-2	土師壺	(10.8)	3.4	①中粒②良好③緑④1/2	外板。横腹で。荒削り。	荒削り。	弱い外縁を持つ。	10
12	H-2	土師壺	(12.2)	(4.5)	①粗粒②良好③緑④1/5	外板。横腹で。荒削り。	欠損。		10
13	H-2	土師壺	(12.2)	4.3	①粗粒②良好③緑④1/4	外板。横腹で。荒削り。	欠損。	弱い外縁を持つ。	10
14	H-2	土師小壺	(10.2)	(8.7)	①粗粒②良好③緑④1/5	外板。横腹で。荒削り。	欠損。	口縁部に一条の沈線を有す。	10
15	H-2	土師壺	(13.8)	(10.0)	①粗粒②不良③にぼい緑④1/4	直立。横腹で。荒削り。	欠損。	口縁部肥厚。	10
16	H-2	土師壺	(13.0)	(8.0)	①粗粒②良好③緑④1/5	外板。横腹で。荒削り。	欠損。	弱い外縁を持つ。	10
17	H-2	土師甕	(17.2)	(6.9)	①中粒②良好③にぼい緑④口縁部1/5	外板。横腹で。斜削り方向荒削り。欠損。口縁部に最大径を有す。			10
18	H-2	土師甕	(21.0)	(6.5)	①中粒②良好③にぼい緑④口縁部1/4	外板。横腹で。斜削り方向荒削り。欠損。口縁部に最大径を有す。			10
19	H-2	土師甕	(24.2)	(6.5)	①粗粒②良好③緑④口縁部1/5	外板。横腹で。荒削り。	欠損。底部に最大径を有す。		10

注) 表の記載は以下の基準で行った。

① 施工は織目 (0.9mm以下)、中粒 (1.0~1.9mm)、粗粒 (2.0mm以上)とした。

② 槌成は、優良・良好・不良の3段階。

③ 色調は土器外表面で観察し、色名は新藤標準土色図 (小山・吉原1976) によった。

④ 大きさの単位はcmであり、現存値を記載した。

Tab. 4 石器・石製品・鉄器観察表

No	出土位置	器種	長	幅	厚	重さ	石材	備考	Pig.
1	H-2	石錐	2.5	1.9	0.4	1.4	黒色安山岩	凹基盤茎頭。右基部欠損。	10
2	X-8, Y-6	石錐	(3.4)	2.4	0.3	(2.3)	頁岩	凹基盤茎頭。先端部欠損。	10
3	表様	砥石	6.1	2.5	1.5	28.8	砂岩	全ての面に使用痕が認められる。	10
4	X-7, Y-5	砥石	(5.8)	2.5	1.8	(45.4)	砥沢石	四面に使用痕が認められるが、下部断面欠損。	10
1	H-2	白玉		2.1	1.2	8.3	滑石		10
2	H-2	白玉		2.0	0.9	5.2	滑石		10
3	H-2	白玉		2.0	1.1	6.6	滑石		10
4	H-2	白玉		2.6	0.6	2.1	二ツ舟軽石		10
1	H-2	針	(2.2)	(0.3)	(0.3)		鉄	1/4残存。頭部先端部欠損。角針。	10
2	X-5, Y-8	針	(5.3)	0.5	0.3		鉄	2/3残存。やや偏平化した角針。	10

注) 表の記載で、大きさと重さについての単位はcm, gであり、現存値は()で示した。

V ま　と　め

遺跡の地形について

赤城山はその裾野を四方に長くひき、山頂部から流れ出る河川によって幾多の開析谷が刻み付けられている。本遺跡地は南北に流れる2本の河川にはさまれた舌状の台地ほぼ中央に位置する。舌状台地上では水に乏しく、おもに桑畠等が広がり、小河川により形成された谷地では、狭隘ではあるが水田が営まれている。そして、この斜面の末端部は比高差10m前後の直線的な段丘崖をなしており、旧利根川のつくった広瀬川低地帯に接している。

本遺跡地の桑畠では、遺物の少量散布が見られ、遺跡西の河川近くの畑では遺物の濃密散布がみられた。また、今回出土した遺物をみると、非常に少量ではあるが縄文時代から平安時代まであり、ほかの住居址の存在が推測された。従って、この地は、小丘陵と小河川からなり、先人居住の好適地と思われたが、実際に300m²で住居址2軒と予想に反して少なかったのは、両河川に挟まれた台地のほぼ中央の高燥地で集落の主体は台地周縁にあるものと想定される。

構造について

本遺跡から検出された住居址は2軒、焼土坑1基、土坑8基である。2軒の住居址はともに、基本層序Ⅲ層で確認され、床面はロームまで掘り込まれている。表土掘削後の標高は、調査区北東で166.60m、調査区南西で163.80mと大きく傾斜している。

調査の関係上、全掘できたのは1軒のみで、他の住居址は調査区外のため部分的な調査にとどまった。ここでは、事实上1軒の住居址にスポットを当て、その成果と問題点を探ってみたい。

形状は確認面からの壁高、東壁平均80cm、西壁平均30cmを測り、ローム壁は平均74°の角度で立ち上がりつて明瞭に検出できた。これは本調査区が北東から南西に大きく傾斜していることによる。平面形は本調査で最大規模の東西6.0m、南北6.0mで面積は34m²を測り、かなり整った正方形を呈する。本調査に入表土掘削後のプラン確認において、3~4軒の重複かと思われたが1軒の住居址と判明してからは、覆土と住居の切り込まれているローム層が鮮明に分かれしており確認は容易であった。

次に床面は全体的には平平坦で、床面のレベル差は10cm前後におさまり、西が高く、東が低いという傾向が見られる。また、住居の竈前と南壁中央部に広がる堅緻面は使用頻度の高さを示唆するものであり、出入り口部分の平面位置を裏付ける重要な要素のひとつである。さらに竪穴式住居に必ず存在する出たり入ったりする場所を出入り口施設と考えれば後者は出入り口施設に關係するものであろうと判断できる。一般的に竪穴式住居の竪穴部を上り下りするには梯子が使用されたと言われている。今回の竪穴床の壁面際に見られる2本の細いピット(P8・9)、壁面に掘り込まれた2本のピット(P10・11)はおそらく梯子をかけるための支えとして使われていた梯子穴に付随するものではないだろうか。もちろん、これらのこととは考古的資料では確認できないものであり、あるいは移動式の梯子や踏み台として利用可能なものを置いていたということも念頭に置く必要がある。(ピット番号、堅緻面はいずれもFig. 8参照)

また、住居西床面下三分の一を一旦掘り起こし、その上に貼り床している。これは毛細管現象による水の上界を防ぐ除湿のための構造とみられた。また貼り床の面は明確に硬化していないことから、敷物を敷いて寝室部分として使用したものと考えてよいであろう。

続いて竈は、北壁東隅から三分の一に位置し、主軸方向はN-6°-Eを指す。現存状況は良好で、全長105cm、最大幅106cm、炊き口部幅40cmを測り、住居内77cm、住居外28cmの規模である。煙道部の立ち上がり角度は49°を呈する。上部構造(側壁と天井)は褐色粘質土を積み上げて作っている。石材等の使用につい

ては住居内に動いたと思われる表面の焼けた石が3つ存在することから、袖部等の補強材に使用された可能性はある。また、使用面の確認の際、焼土が予想したほど多くはなく、どこまでが天井部の崩落でどこからが使用面なのか確認にやや手間取った。そして煙道部は住居から少しでも程度で、主体は住居内にある古墳時代住居址に一般的に認める傾向を示している。

最後に柱穴であるが床面上には7カ所のピットを確認している。主柱穴はP1-P2が1.2m、P2-P3が1.5m、P3-P4が1.2m、P4-P1が1.5mで、P1-P3、P2-P4を結ぶ対角線の長さは、ともに2.0mを計測する。P5は竪のすぐ東側、住居址の北東コーナーに位置し、不整形の貯蔵穴で、底部はやや摺鉢状になる。なお、住居の西半分貼り床面をはがしたところP1、P2のすぐ東側に新たな柱穴2本が確認された。これは上屋建て替え前の旧住居址のものと考えられる。主柱穴の組み合わせについては、東側には貼り床が見られないことから当初P6、P7、P3、P4で、P3、P4については増築時に柱穴の直径も拡大して使用したものと考えられる。(Fig. 8 参照)

なお、竪すぐ西とその延線上には上屋棟の補助に使用されたと思われる壁外柱穴2カ所が確認された。その他、壁外柱穴と思われるものが数箇所見つかったが、桑の根によるものか、あるいはちょうど等高線に沿う形で入っていることから818年の地震によるものか判断つけがたい。

上屋構造について

この住居址は主柱穴はもちろん、壁外の支柱穴、垂木穴などが検出されたことにより住居の上屋構造を考えるうえで貴重な資料を提供している。そこでこの住居址の堅穴式住居の上屋構造について想定してみるとする。

まず、この住居は当初の住居を西側方向に1、2m拡幅しているものと考えられる。これは床面下の掘りこみの調査で古い柱穴が確認されていることで証明される。その拡幅も計画的で、柱筋を合わせていることからも新旧住居の関係者による拡幅であることは明らかである。当初の住居ではやや南北に長い平面形をもつものであった。主柱穴の距離関係は南北が2.7m、東西が2.3mの間隔である。

拡幅後の住居では南北間は変わらないが、東西の柱間は2.2mから3mに広げられたとともに柱穴も大型化する。場合によれば住居東側の柱穴も拡大しているかもしれない。

上屋は南北に棟の走行があったものと考えられる。それは住居西南隅の南側の主柱穴の線上の壁外垂木穴が確認されたことによる。まず4本の主柱をたて、梁と桁をわたし、東西方向の柱筋に壁外から主垂木をかけ、棟を乗せたものであろう。また、南北方向の補強垂木は中央から桁に架けたらしく南北壁中央壁外に支柱穴が確認されていることによる。

それ以外の垂木は南壁外の小柱穴の間隔からすると90~120cmで、コーナー部分は細かく、直線部分はやや間隔をあけるような配置で垂木が配置されていたものと見られる。この間隔でいえば垂木の総本数は22本と想定される。

この想定でいくと竪の位置も垂木の間にうまく収まる。竪が北壁に設置されているのも棟の走行と矛盾しない。また、棟の走行を南北としたのは現地表が東西で大きな傾斜をみせることも影響しているのかもしれない。

入り口については南東隅から2本目と3本目の垂木の間にあり、竪の反対側に位置している。壁から0.5m入った位置に幅0.8mの2つの穴があり、0.65mの高さがある壁外からの進入にはハシゴのようなものを据えていた可能性が強い。

以上、H-2号住居の上屋復元について想定したがこの復元は補助柱穴の存在から想定したものであり、この時期の堅穴式住居の復元をするうえで貴重なデータを提供しているといえる。

なお、Fig. 5には、弥生・古墳時代の入口施設を持つ県内の遺構とその復元図を参考として載せておく。

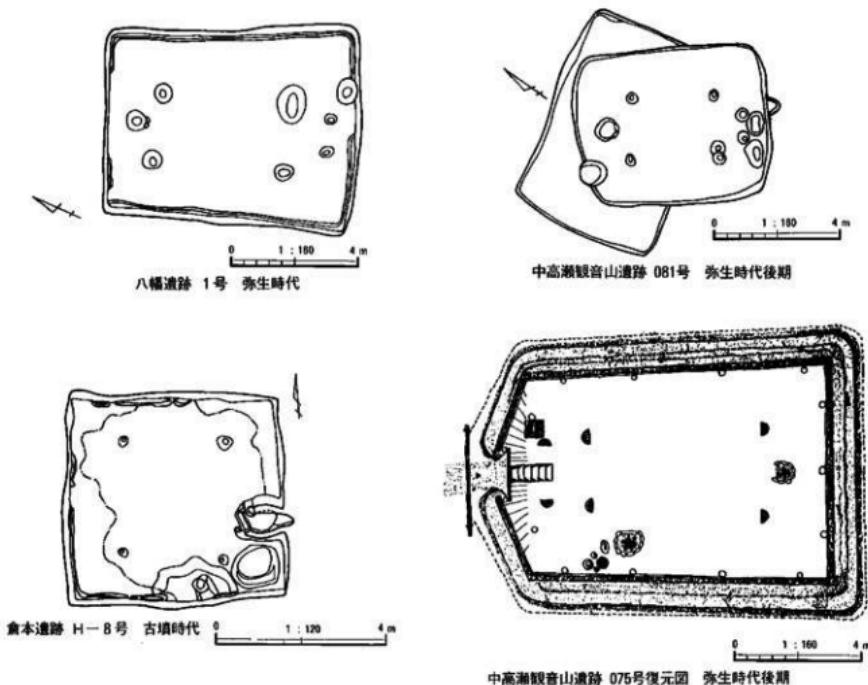


Fig. 5 入り口施設を持つ遺構と復元図

出土遺物について

本遺跡からは、土師器片を中心に1672点余り出土したが、非常に良好の住居址であったにもかかわらず石鏡や白玉、砥石を除いた他は、完形に近い遺物もなく、まったくと言っていいほど期待外れであった。住居廃棄の原因が突発的事故によるものではないことを示している。

住居址2軒から出土した遺物はほぼ同時期のものであると思われるが、坏は復元できた全てのものが弱い外縁を有する模倣品で、直立口縁はみられるが内傾するものはみられず、外反あるいは外傾する口縁が主流で平底気味の浅い底部のもの、もしくはやや深めの丸底に直線的に外傾する口縁をもつものである。甕は胴部上位にやや強いふくらみを持ち、斜擗位のヘラ削りが施されるものである。また、土師器小形甕は球形の胴部に直立して外傾、もしくは直立する口縁を持つもののみられた。さらに白玉4点が出土しており、材質は滑石製が3点、二つ岳形石製が1点であった。前者は厚さや径、孔の大きさなどほぼ同等のものであり研磨されていることからも完成品と考えてよい。なお、剥片、チップ等の製作破片はみられなかった。

出土遺物が少なく本遺跡土器群の特色の全容はとらえられるものではない。従って以下の分類自体仮説の域を出るものではないが今回の出土遺物の編年観は、7世紀初～中葉いわゆる鬼高式を中心とした時期に位置づけられるものであろう。当該地域の一層精度の高い分類を行う際の踏み台としての役割を期待する。

300m²という非常に小規模な範囲の調査ではあったが、「遺跡の宝庫」と呼ばれるこの地域は、比較的遺構の保存状態も良好である。特に今回たった1軒の全掘となったローム層を切り込んだ古墳時代の住居址は、古代に生活した人々も快適な暮らしを創意工夫をもってしていたことを垣間見せてくれた貴重な資料を提供してくれた。今後、新たに実施される調査結果を踏まえ研究していくことにより、本遺跡と周辺遺跡との関連もより一層明確になり、この地域の歴史が解明されることを期待したい。

《参考文献》

前橋市教育委員会	(1984)	芳賀東部圃地遺跡Ⅰ	-古墳～平安時代編その1-
前橋市教育委員会	(1988)	芳賀東部圃地遺跡Ⅱ	-古墳～平安時代編その2-
前橋市教育委員会	(昭和56年度)	猿峯遺跡	
前橋市教育委員会	(1984)	小明神遺跡群Ⅱ	
前橋市教育委員会	(1987)	小明神遺跡群Ⅴ	
前橋市埋蔵文化財発掘調査団	(1992)	芳賀北原遺跡	
前橋市教育委員会	(昭和58年度)	端氣遺跡群Ⅱ	
高崎市教育委員会	(1989)	八幡遺跡	
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	(1995)	中高瀬観音山遺跡	
考古学を楽しむ会	(1997)	土壁・剣陣分	
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	出土した古代の土器	ー展示レポートー	

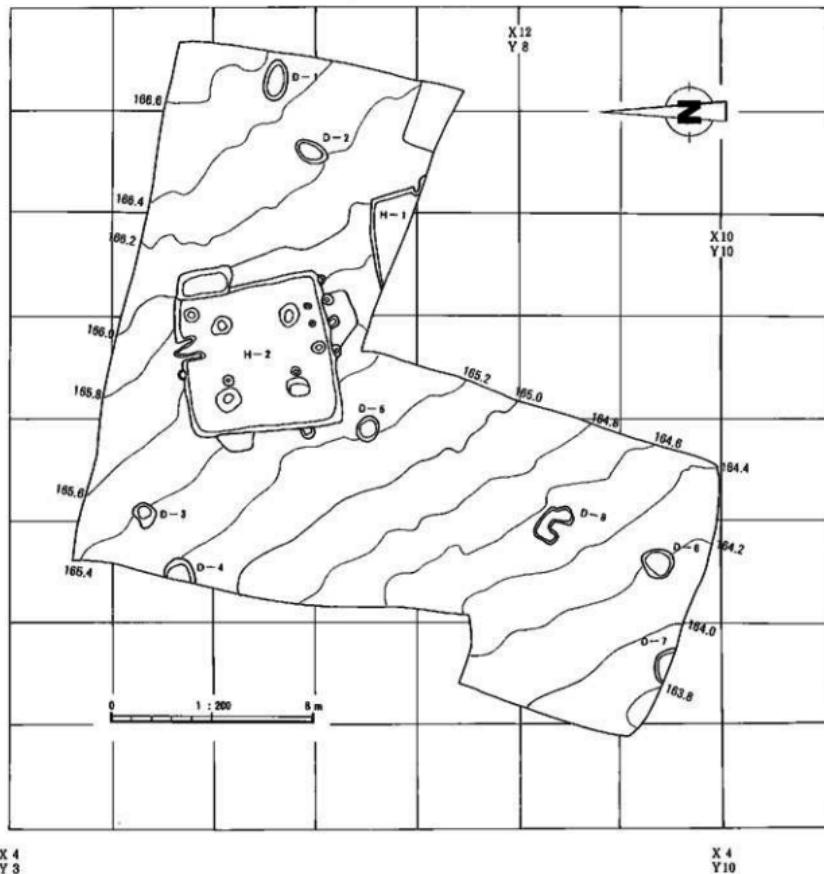


Fig. 6 避防・遺構全体図

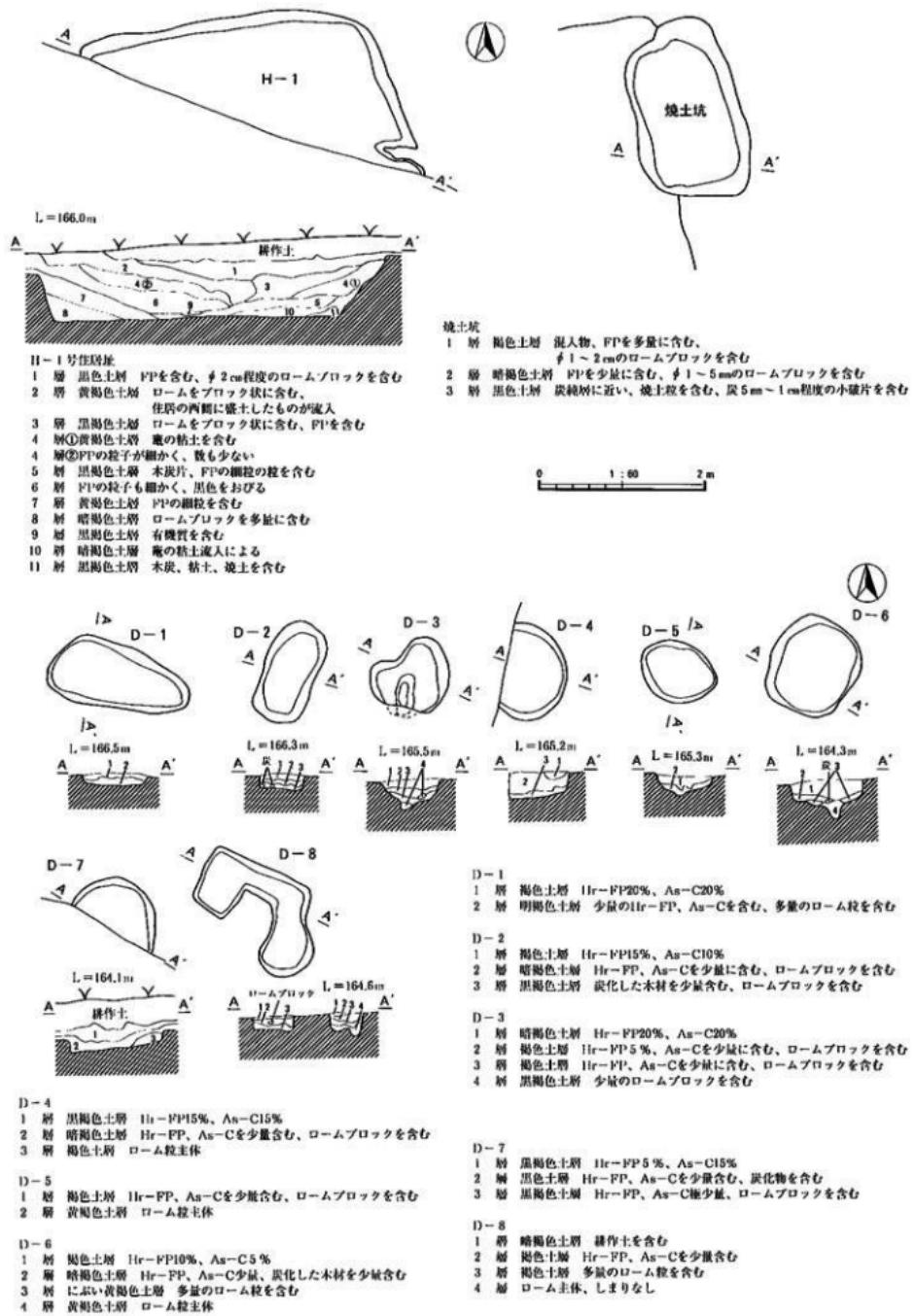


Fig. 7 H-1号住居址・焼土坑・土坑

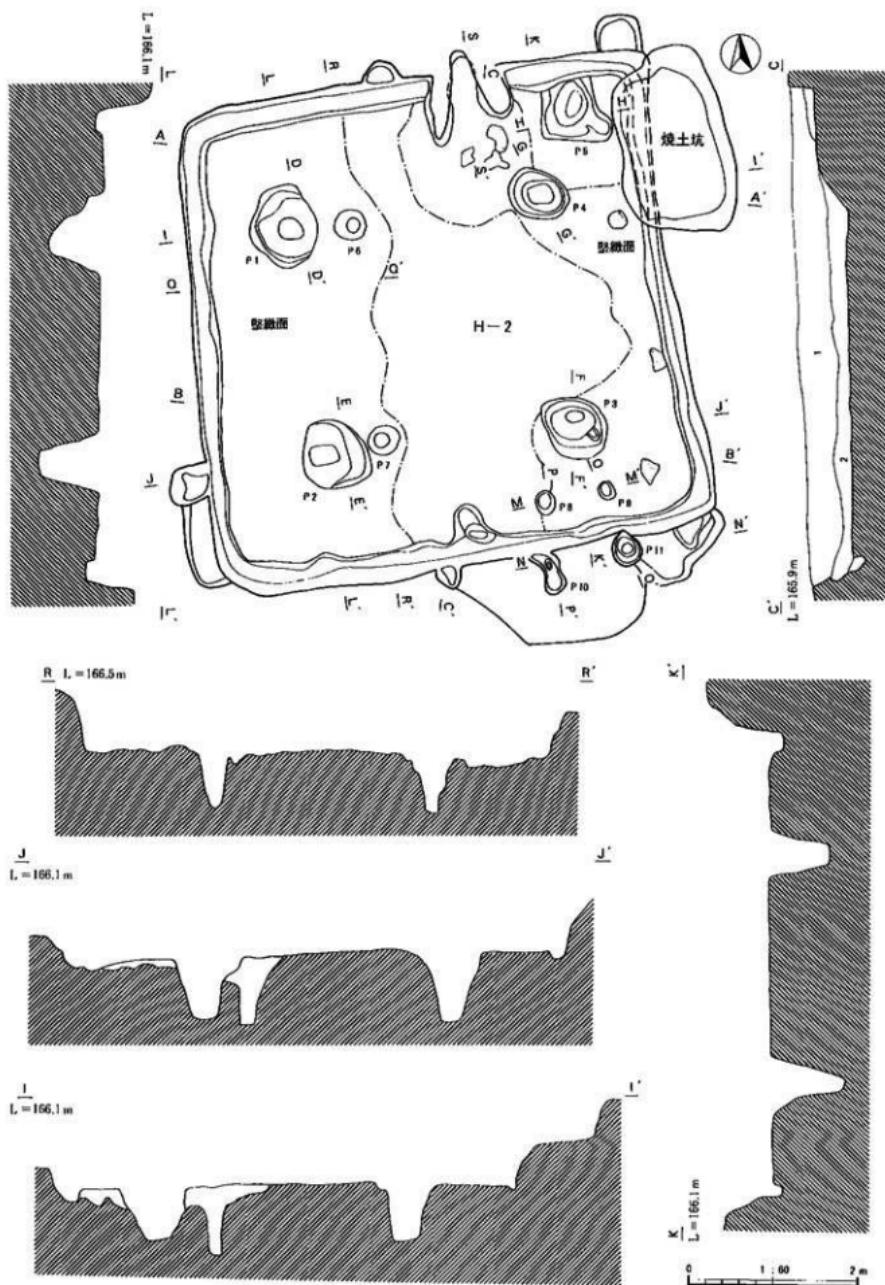


Fig. 8 H-2号住居址

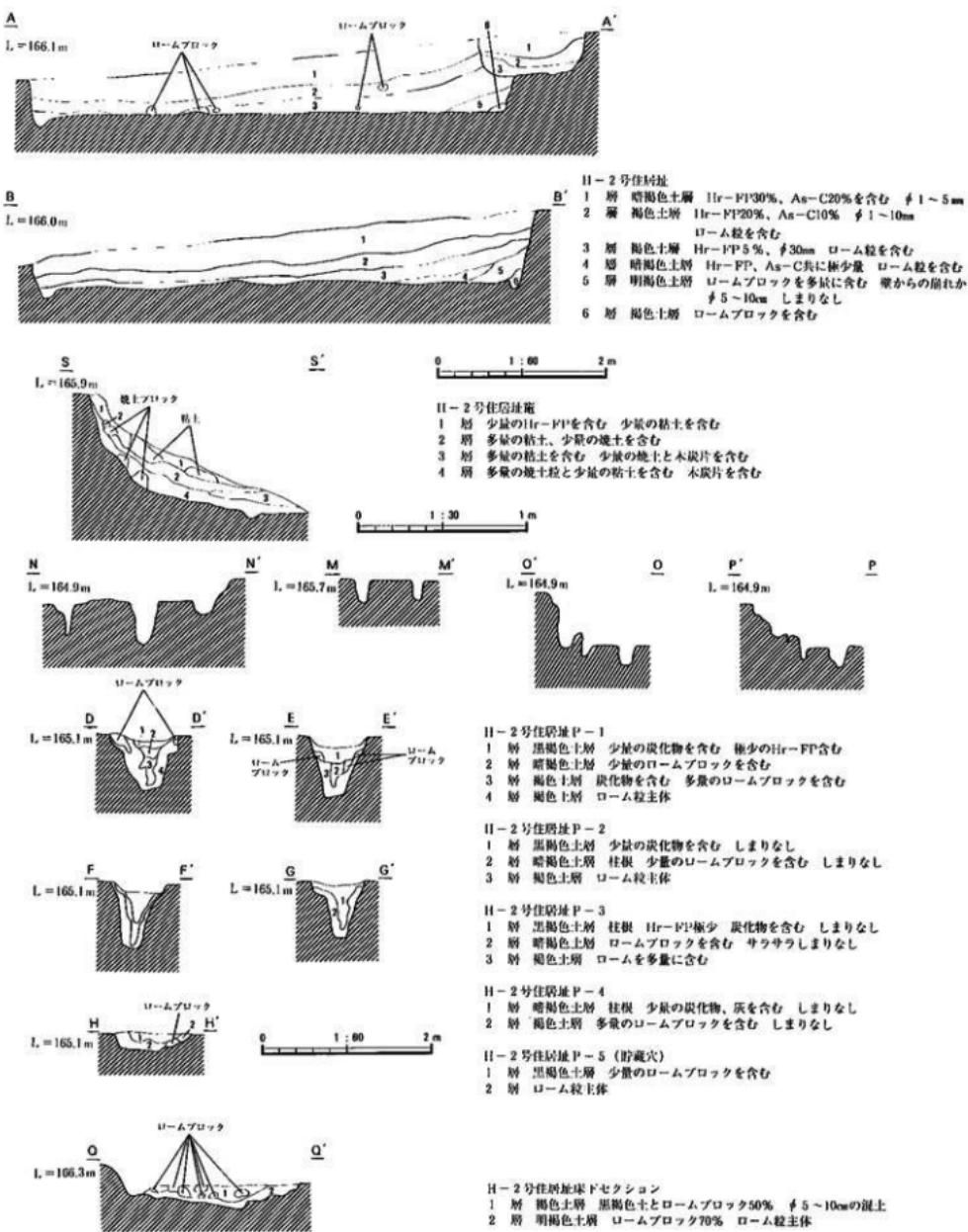


Fig. 9 H-2号住居址

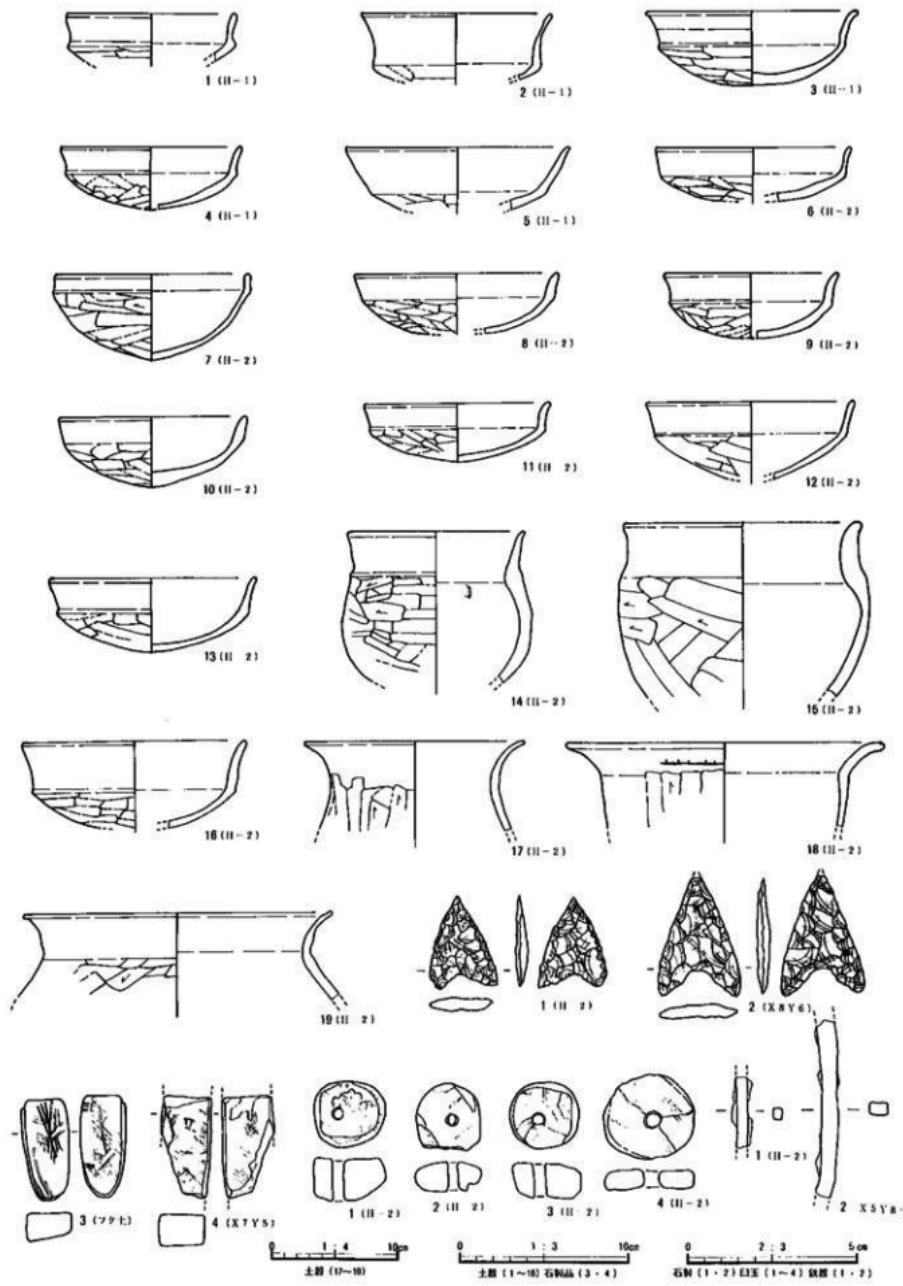
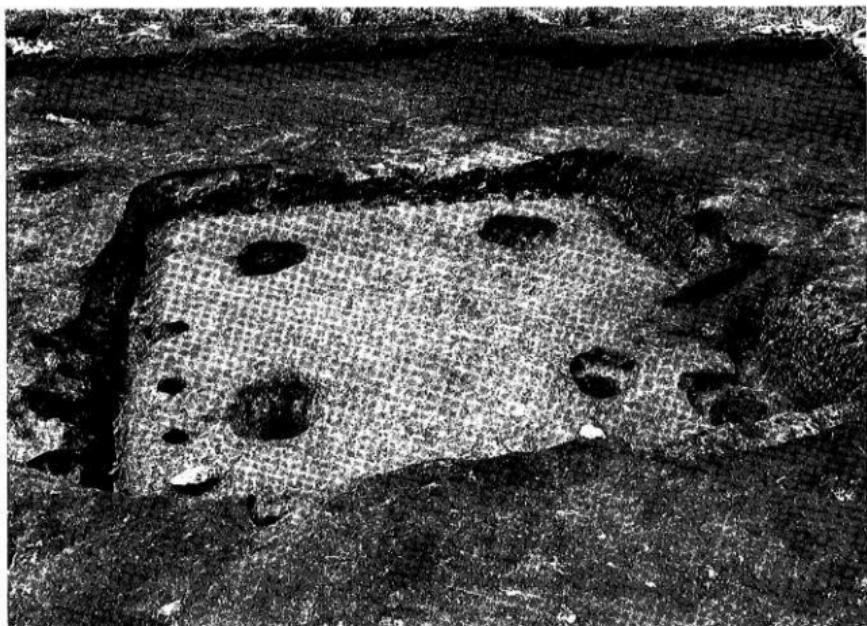


Fig. 10 H-1・2号住居址出土の土器、石製品、鉄器



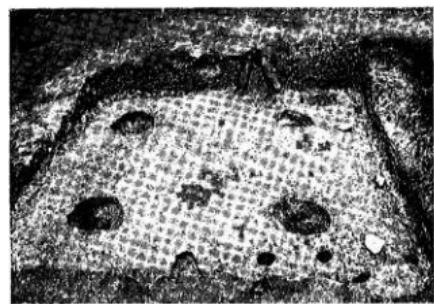
H-2号 住居址全景(東から)



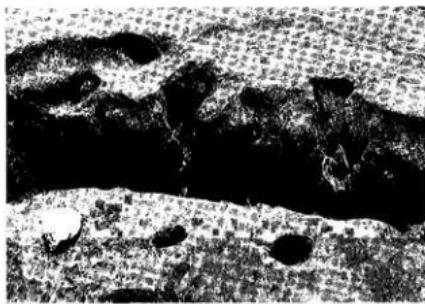
H-1号 住居址(北から)



H-1号 住居址カマド(西から)



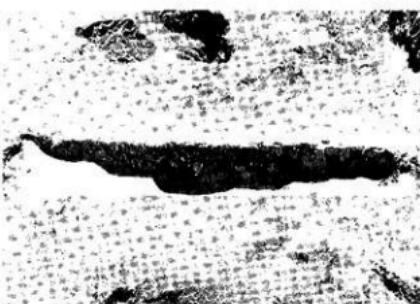
H-2号 住居址(南から)



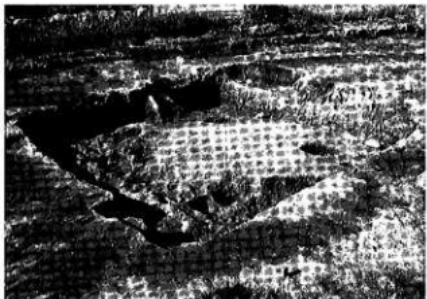
H-2号 住居址出入り口施設



H-2号 住居址カマド（南から）



H-2号 住居址貼り床セクション（北から）



H-2号 住居址（南西から）



X 7, Y 5 遺物出土状態（西から）



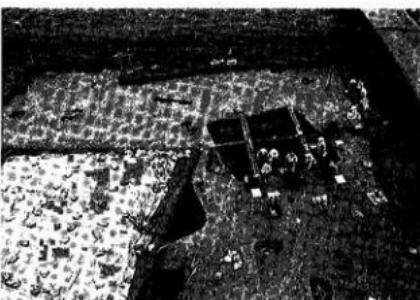
H-2号 住居址遺物出土状態（北西から）



坑土坑（南西から）



調査区全景（東から）



発掘作業風景（東から）

抄 録

フリガナ	ゴダイヒノキミネニイセキ
書名	五代桧峯Ⅱ遺跡
副書名	五代町保育園建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	坂口 好孝 真塙 明男
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371 群馬県前橋市上泉町664-4
発行年月日	西暦1998年3月31日

フリガナ 所取遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位 質		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ゴダイヒノキミネニ 五代桧峯Ⅱ	マエバシシゴダイイマナ 前橋市五代町	10201	9C14	36°24'52"	139°07'19"	19970430 19980331	300m ²	五代町 保育園建設工事

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特別事項
五代桧峯Ⅱ	住居址	古墳時代	住居址2軒		

五代桧峯Ⅱ遺跡

平成10年3月24日 印 刷

平成10年3月31日 発 行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

前橋市上泉町664-4

TEL 027-231-9531